



第240号

公益社団法人
医学振興
銀杏会

(編集同人)

川越裕也	荻原俊男
門田守人	米田正太郎
杉本武木	田村雅正
朝野典良	
黒木尚長	

年頭あいさつ

戦後70年目の新年を迎えて

理事長 岸本 忠三

新年明けましておめでと
うございます。

今年は1945年に戦争が
終結してから70年目という節
目の年を迎えました。70年の
長きに亘って全く戦争に巻き
込まれなかったということは
我が国の歴史にとっても特筆
すべきことであろうと思いま
す。その結果として我が国は
見事な発展を遂げ、医療の面
の進歩も著しく、平均寿命は
80才台に達する迄になりまし
た。

私も昨年後期高齢者の仲間
入りをしました。団塊世代が
後期高齢者の仲間入りをし
てくることにより、2025年

までこの増加は続くと言われ
ています。日本の医療がどの
ようにこの問題に対処してい
くかということはこれからの
重要な問題であろうと思いま
す。私個人として思うのは何
らかの生きた証を残して如
何に上手にこの世に別れを告
げることが出来るか、という
ことだと思っています。

この70年、平和憲法の下で
着実に発展してきた日本は科
学技術の面でも見事な進歩を
遂げました。昨年は「E」の
発見で日本人3人がノーベル
物理学賞をもらいました。こ
れでノーベル賞受賞者は合計
22人になりました。米英独仏

に次ぐ数です。2000年代
初めに科学技術基本計画に、
2050年迄にノーベル賞受
賞者を30人にすると書かれて
いました。誰もがこれは書き
すぎではないかと思いまし
た。しかし、多分30人を超え
るかもしれません。しかし赤
崎教授らの受賞研究は1900
年代後半の基礎的な研究成果
によるものです。国は「E」や
「G」のノーベル賞を例に挙
げ、実用化につながるような
創薬や再生医療の研究を、と
言っていますが、決して応用
を目指すような短視眼的な研
究からは大きな成果は出ない
と思います。

画題 マーガレット



絵を習い始めてかれこれ30年になります。それまでは花には興味がなかった
のですが、鉛筆デッサンから油絵と進むうちに、いろいろの花の表情や隠され
た色彩をキャンバスにのせる楽しみが出てきました。

島田憲次 (昭47)

年の初めにあたって、大阪
大学医学部や病院、関連の研
究施設や病院から素晴らしい
成果の出ること、若い学
友会会員や学生が成長し素晴
が元気にそれを応援できるこ
とを祈りたいと思います。

第26回シンポジウム

地域医療の課題とその対策

平成26年度の医学振興銀杏会主催のシンポジウムは、10月31日(金)銀杏会館の阪急三和ホールにて開催された。大阪大学医学部附属病院の各関連病院代表といった方々が多数参加された。

定刻に開会。早石雅有副理事長(昭42)の司会で岸本忠三理事(昭39)が開会の辞を述べた。

続いて、澤芳樹医学系副研究科長(昭55)が挨拶、野口眞三郎副病院長(昭55)が阪大病院の現状を報告した。続いて、この1年間に医学部に就任した新教授、坂田泰史先生(平5)から挨拶があった。今回は、現在最も関心の深い「認知症診療の進歩と地域医療連携」をテーマに、荻原



講演 鳥羽研二先生



コーディネーター
荻原俊男先生



コメンテーター
工藤 喬先生



コメンテーター
谷口典男先生

俊男副理事長(昭43、森ノ宮医療大学 学長、阪大名誉教授)をコーディネーターとして、鳥羽研二先生(昭53・東大医、国立長寿医療研究センター 総長)による基調講演が行われた。その後、コメンテーターとして、谷口典男先生(昭54、浅香山病院 精神科院長)、工藤喬先生(昭61・大阪医大、阪大教授 保健センター精神科)によるコメンテーター発言および参加者による討論が行われた。

◇

鳥羽先生の基調講演要旨は、下記のとおりである。

認知症と予備軍800万人時代を迎え、本邦では医療と介護の総力で対処する必要がある。再認識されている。

認知症の方の半数は「身近なかかりつけ医にみてもらいたい」と回答している。認知症疾患医療センターなどの専門医療機関は待ち日数も長く、診断治療ケアのすべての面でもかかりつけ医の重要性は増すばかりだ。まずは患者さんとの出会いが重要だ。初めていせよ、生活習慣病で見ていた人に認知症の疑いが出たにせよ、「認知症の疑い」の本人へのインパクトを十分感じ、「このお医者さんなら任せられそうだ」という信頼関係を強めることが大切だ。いきなり記憶力検査などをせず、まずは体のことや、最近の生活ぶりなどじっくり聞いて、身体的に困っていることをくまなく解決したい。眼、関節、皮膚など、専門医でなくても解決できるものにも、かかりつけ医は対応したい。総合内科にこのような素養を身につけた学問が老年医学である。

患者家族からの質問に「大丈夫です」と応えられる知識と情報準備に活用していただければ幸いです。

◇

基調講演ならびにコメンテーター発言および参加者による討論の要旨は、本年度会費を納入済みの方には同封している「学友会会誌」に掲載しているのでご覧下さい。

早石雅有(昭42)



<平成26年度 秋 叙勲と受賞>

瑞宝中綬章	森脇 要先生(昭36)
旭日双光章	青山 喬先生(昭43)
慶應医学賞	濱田博司先生(昭50・岡山大医)
救急医療功労者	大阪市長感謝状 嶋津岳士先生(昭55)
救急医療功労者	総務大臣表彰 横田順一朗先生(昭51)
武田医学賞	高井義美先生(昭49・神戸大医)
日本医師会最高優功賞	三上裕司先生(昭49)

<叙位>

正四位 故藤田尚男先生(昭28・京府医大)
(平成26年8月27日ご逝去)

次期役員
選挙につ
いて

次期役員候補となった会員の詳細については、
同封別紙をご覧下さい。

<寄附御礼>

当会の公益目的事業へご寄附をいただき、誠に有難うございました。

平成26年8月12日

会員ご遺族様より、金一封をご寄附頂きました。

平成26年10月28日

会員様より匿名にて、金一封をご寄附頂きました。

※公益社団法人への移行に伴い、平成23年4月1日より当会へのご寄附は、個人・法人とも税金控除の対象となります。詳細に関しては、当会事務局までお問い合わせください。

医学部長通信

第2回 金田安史(昭55)

医学系研究科では、独立准教授(任期制)の制度を平成19年度より導入し、スペースと資金を提供して次世代を担う教授候補を育成して参りました。すでに妻木範行教授(京大)、高島成二教授(本学)、河原行郎教授(本学)を輩出しております。現在は、ゲノム修復機構を研究している中田慎一郎准教授が活躍中ですが、今回新たに、記憶の分子機構を解明している松尾直毅准教授を迎えることになりました。新たな研究領域を本研究科に導入してくれることと思います。また教育では、文科省のプロジェクトの一環として、健康・医療イノベーションに関する教育、研究を行う国際・未来医療学講座を設置しました。これは本学で初の特設講座と命名され、健康・医療イノベーション学を全学部生に提供いたします。将来の医学、医療を支える多彩な人材が様々な分野から育つことを期待しています。附属病院の未来医療開発部には国際医療センターが設置され医療の国際展開を推進していますが、その国際的な認知度も高くなっています。それとともに国際学術交流協定校も実質的に見直しており、学生交流(グローニンゲン大学、サラワク大学など)、研究者交流(カロリンスカ大学、サンクトペテルブルグ大学)、医療面での協力(カタールハマド病院)など、それぞれに特徴づけた協定を結ぶように致しました。海外からの訪問者もますます多くなり、その方々にアピールするための冊子やプロモーションビデオの作成に加え、今回新たに医学部医学科、医学系研究科のロゴマーク(下図)を決定し、それを入れこんだクリスタルの記念品も作成しております。先日は、本学の名誉教授より医学研究科に対してご寄附を賜りましたので、感謝状とクリスタルの記念品を贈呈し、お名前を冠した基金として教育、研究に使わせて頂くことにいたしました。改めて感謝申し上げます。



トピックス

細胞の守護者オートファジー

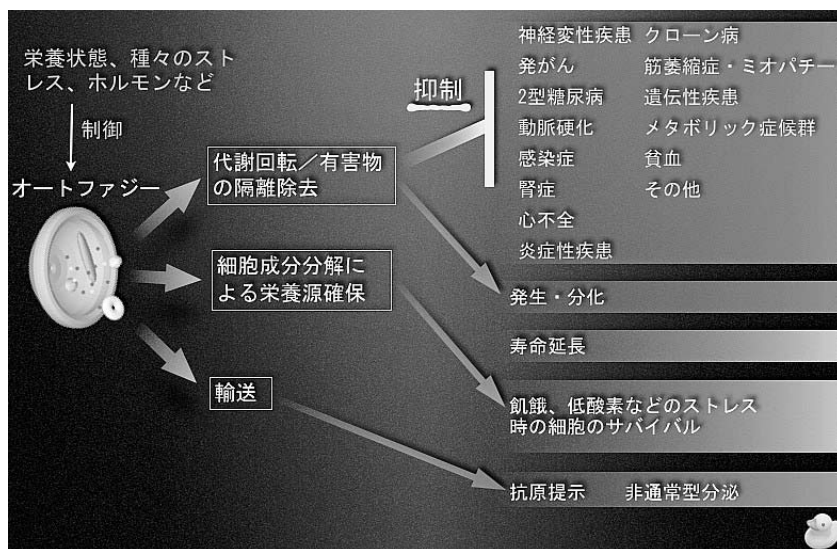
ギリシャ語で「自分を食べる」という意のオートファジーは、自己成分の分解・再利用を行うために全真核細胞が備える細胞内大規模分解システムである。オートファジーでは、オートファゴソームと呼ばれる膜オルガネラが新規に形成され、細胞質やオルガネラの一部を囲い込み、そこに消化酵素を内蔵するリソソームが融合し分解が起こる。飢餓時に亢進しサバイバルに必要な栄養源確保に働くことがよく知られているが、近年には、細胞成分の代謝回転と有害物除去により細胞を健全な状態に保っていることも判ってきた。オートファジーの欠損は、神経変性疾患、II型糖尿病、発がん、心不全、クロン病、炎症性疾患、感染症、ミオパシーなど多岐に亘る疾患の発症につながる。さらには、発生・分化、免疫、寿命延長などにも関わること

が明らかになってきており、極めて重要な細胞機能として注目されている。最近オートファジー関連遺伝子の変異による遺伝疾患が、MOS症候群など幾つか見つかった。一方でオートファジーのサブイバル機能が、がん細胞の転移・浸潤・増殖を助けていることが判明し、米国では抗がん剤とオートファジー阻害剤の併用療法の治験も開始されている。

オートファジー分野は、1963年には公式の場でオートファジーという言葉が既に使われていたものの、分子レベルの解析が進まず未開の地として取り残されていた。その状況は、1993年の大隅良典教授(現東工大)による酵母オートファジー関連遺伝子群ATGの同定により一変し、その後日本を中心に予想もしなかった発展を遂げることとなった。私の研究グループはその一翼を担い、哺乳類オートファジーの分子機構と疾患との関係の解明を進めてきた。本分野における個人別論文総被引用数は、私を含めた日本人が5位までを占めており、トムソンロイター社が今年発表した「世界で最も影響力のある科学者」の生化学・生物学分野で選ばれた日本人6人(世界では200人弱)のうち3人は私を含むオートファジー研究者であった。このように本分野は日本が世界をリードしているが、病態との関わりが明らかにするにつれ研究競争は激化しており、欧米や中国・韓国の猛追を受けている。日本が今の地位を維持するためには、なお一層の努力が必要である。

今後は臨床応用を見据えた研究が潮流となろう。私の研究室も、医学系研究科のご支援によりスペースを借り受けることができたので、オートファジーセンターを今年度中に設置し8つの診療科との共同研究を鋭意展開する予定である。

吉森 保(昭56・阪大理)



提

言

の子供が消えているのである。未婚女性の結婚希望率89・4%、既婚夫婦の理想子供数は2・42人、しかし現実には結婚しない、あるいはできない若者も多い。体外受精の技術を用いて産まれる子供は年々増えているがそれでも全出生の3%程度である。20、30代女性の未婚率を改善し、1人子供を作ったカップルにもう1、2人作る気になってもらう方が話は早い。子供を持たない理由に将来の経済的不安と、現実には女性にふりか

かる出産・育児不安の両方がある。前者は完全に政治経済の世界であるが、後者に対して医療は何ができるのだろうか？

全国の自治体は出産場所の

少子化対策

少子化対策が叫ばれて久しい。現在の特異合計出生率が連続と驚くべき早さで人口減少が進み、日本人はやがて地球上でパンダか朱鷺のようになる。決して誇張ではない。この数年間大阪府下では毎年1000人の新生児が「消えて」いる。大阪府下全体で毎年小学校の新入生30クラス分

確保を政治マターとして小さな自治体病院の分娩室維持に躍起となり、その結果突発的危機的状況には対応力のない分娩施設は存続し、小人数で拘束時間だけ長く、やるべき

事ができない産科医療現場をみて若者は産婦人科を選ばない。育児不安の最も強い出産直後のサポートは数日間分娩施設が請け負うのみであとは家で自分で何とかするしかない。産後ケアに関して自治体が積極的に関与している所は少数ながら出てきているがまだ一般的ではない。日本では分娩場所で妊婦健診をするこ

る。思い切って分娩場所とそれ以外の産前・産後ケアを分離して大規模分娩施設を1時間以内に到達できる中核病院に配置、それ以外の近くの自治体病院は妊婦健診を行い、産後ケア入院ができて、そのまま育児支援も受ける形に特化してはどうだろうか。自治体の責任は妊娠・育児への経済的、肉体的、精神的支援であり、出産は広域地域が責任を持つ、という形はすでに先進国では当然のこととして受け入れられている。おなかの

大きな女性が病院待合室にたくさんいる光景をどこかで見たな、と思いつくナイジェリアである。すべての自治体病院で分娩ができる必要はない。地域で育児不安を減らすため産前産後から保育までの継続的支援をワンストップサービスで提供できる組織を作り産科医・小児科医・助産師・保健師・保育士たちが協力するモデルを作れば真の「子育て支援自治体」になれるのではない。

木村 正(昭60)



…その 141

医学部においては、一昨年末の救急災害センターの新築オープンなど記念すべきことがあり、昨秋には医学部、附属病院の移転計画も具体化

べた教えで、和顔は理解しやすい。「和」は穏やか、和やかという意味であるから、優しい笑顔で他人に接しなさいということでしょう。初対面

人にやさしくほほえんでかける時の言葉」と説明されている。誰もあかちゃんに向かって怒鳴る人はいないでしょう。なるほどと思うが、理解するのが難しい。そのような

思わず力を入れて押ししてしまった。三輪車はスピードを出し、子供はバランスを崩し転倒した。顔中血だらけになり泣き叫ぶ子供を抱えて必死に走って下宿に連れて帰った。その血だらけのわが子の顔を見て叔母さんは次のように話した。「この子の顔の傷は浅いから心配しなくても治りますよ。それより長時間遊んでくれてありがとう。」氏は自室に戻り、号泣した。顔の傷は7針縫う大傷であった。私たちは誰でも優しい言葉で救われた経験を持っている。

ますし、厳しい愛の言葉で叱咤激励されて立ち直る機会を与えられたこともあります。意識しない何気ない一言で相手を傷つけることもあれば、救うこともあることを自覚すべきです。愛情から発せられた言葉はどんなに厳しくても相手を救うことができますと言確信をもって言葉をかけたいと思います。

「和顔愛語」

一昨年の4月グランフロント大阪、12月東京銀座で近大マグロなど養殖魚専門料理店の開業では近畿大学の「実学教育」が高く評価されました。昨年になり、日本経済産業新聞、関西財界セミナーなどからの受賞が続き、うれしい多忙を極めた年明けでした。昨年度は大学受験志願者数が日本一になり、責任重大です。

し、プランの詳細を公表できるとしています。

「和顔愛語」

平成26年(2014)の年頭の所信です。曹洞宗の開祖である道元禪師の言葉です。人に接する時の心構えを述べ

で相手を緊張、警戒させるような顔をしては相手にもその気持ち伝わり、素直に語り合うことはできません。

一方、「愛語」も優しい、愛情のこもった言葉であると思います。道元禪師は「赤ちゃんにやさしくほほえんでかける時の言葉」と説明されている。誰もあかちゃんに向かって怒鳴る人はいないでしょう。なるほどと思うが、理解するのが難しい。そのような

折、「道元禪師の愛語の心に学ぶ」酒井大岳氏(致知2013.10)を読む機会を得た。氏が18歳の時、叔父の家に下宿していた時の事、叔母から「3時間でいいから3歳の従兄弟の面倒をみてほしい」と頼まれた。その子と3時間楽しく遊んだ帰り道、三輪車に乗った子供の後ろから

面は7針縫う大傷であった。私たちは誰でも優しい言葉で救われた経験を持っている。

次は、大阪府立病院機構理事長遠山正彌先生(昭47)にお願いしました。近畿大学学長 塩崎 均(昭45)

診療科紹介

眼科

本教室は、明治24年、大阪医学学校時代に開講されました。平成26年現在までに、約120年の歴史を刻んできました。小職は第九代教授として、平成22年に故田野保雄教授の後を継いでおります。本教室は、伝統的に臨床力に極めて優れていることが特長でありますが、その根源は、全国に先駆けて約50年ほど前からはじめた専門クリニックにあります。専門クリニックには、角膜、サージカル網膜、メデイカル網膜、眼炎症、斜視・神経眼科、緑内障があります。各クリニックには、全国で有名な各専門領域の医師を配置し、どんな重症眼疾患に対しても、最善で最先端の治療ができる診療体制を構築してきました。また、専門クリニックは互いに連携しており、複数の眼疾患に罹患している患者にも高いレベルの医

療が提供可能となっております。症例数も多く、外来には1日平均200〜300人の患者が来院され、年間2000件を超える手術を行っています。糖尿病網膜症、変性近視、網膜静脈閉塞症や増殖性硝子体網膜症といった重症の眼底疾患に対し、網膜復位術や硝子体手術をハイボリウムで実施しています。また、黄斑円孔や黄斑上膜、黄斑浮腫などの黄斑疾患に対し、日帰りもしくは短期入院の、25〜27G硝子体手術を数多く施行しており、自らの術式の改良や開発を行いながら、低侵襲手術による視機能の早期回復を得ています。

緑内障クリニックでは、難治性緑内障全般の手術を積極的にを行っています。また、これまでの画像診断を用いた緑内障治療への取り組みに加え、サージカル網膜クリニックと協力し、抗VEGF抗体併用血管新生緑内障手術を積極的に導入し、手術の安全性および視機能予後の向上に効果を挙げています。

阪大眼科は、再生医療の開発では日本のトップランナーの一つであり、世界的な業績を輩出しています。中でも、国家プロジェクトとしてのiPS細胞の角膜疾患への応用を推進しており、2年以内に臨床応用する予定です。さらに、人工視覚の研究、加齢黄斑変

性の治療薬開発、新しい手術法の開発など、常に新しいアイデアで、先端医療の開発に取り組んでいます。以上のように、本教室は、眼科疾患全般に対して、高い診療レベルの保持と先進的治療方法の開発を行うとともに、眼と視覚に関する基礎研究でも世界に貢献することを目指しています。このような環境の中で、最も大切なことは、次世代を担う眼科医師と眼科研究者を育成することであると認識し、教職員全員で教育に最大のエフォートをかけています。

西田幸二(昭63)

角膜移植、角膜感染症、ドライアイ、屈折矯正手術などを中心として、最高水準の角膜診療を行っています。特に、角膜内皮移植や深層層状角膜移植、輪部移植、羊膜移植など、最先端の角膜パッチ移植(部分的層状角膜移植)を行っているのが特長です。加えて、培養角膜上皮細胞シート移植や培養口腔粘膜上皮シート移植など、世界初の角膜再生治療法を開発し、国内のみならず海外からの患者の紹介も受けています。

サージカル網膜クリニックでは、わが国でも有数の手術実績を有しており、網膜剥離、糖尿病網膜症、変性近視、網膜静脈閉塞症や増殖性硝子体網膜症といった重症の眼底疾患に対し、網膜復位術や硝子体手術をハイボリウムで実施しています。また、黄斑円孔や黄斑上膜、黄斑浮腫などの黄斑疾患に対し、日帰りもしくは短期入院の、25〜27G硝子体手術を数多く施行しており、自らの術式の改良や開発を行いながら、低侵襲手術による視機能の早期回復を得ています。

メデイカル網膜・眼炎症クリニックでは、加齢黄斑変性などの各種黄斑疾患に対する薬物治療や光線力学療法など内科的治療、ぶどう膜炎に対する抗体療法や局所薬物投与を積極的に行っています。また、近年増加傾向にある眼原発悪性リンパ腫に対する診断と治療にも精力的に取り組んでいます。



小職の好きな言葉に「天時不如地利、地利不如人和」(孟子)があります。「何事かを達成しようとする時、最も大切なのは、人間そのものの努力で、人の和(団結)である」という意味がこめられています。今後、教職員が一致団結し、学内外の多くの方がたのご指導ご支援を仰ぎながら、若い優秀な医師、医学人が次々と育つ新しい教室づくりに一層取り組む所存です。次は耳鼻咽喉科・頭頸部外科学の猪原秀典先生にお願いいたします。